

論文の和文要旨

論文題目

「叛逆のバリケード」を歴史化する
—日大全共闘の「記録する運動」を中心に—

氏名

趙 沼振

本論文では、歴史のなかに日大闘争を位置づけることを目指し、日大全共闘の当事者たちによる「記録する運動」の軌跡をたどることで、インタビュー調査で得られた証言と併せて日本の「1968年」における「スチューデント・パワー」のあり方に迫る。

世界の「1968年」という時期を境に、第二次世界大戦の戦後世界が揺らぎはじめた。米ソ両極体制によって東西の冷戦構造が構築され、科学技術が発展するとともに管理社会の問題が顕在化し、それへの反応として世界各地で同時多発的な闘争が勃発したのである。日本の「1968年」も、国境を越えて世界の諸地域が相互に影響しあっていた革命運動の時代に位置づけて総体的に評価されるようになってきている。当時のさまざまな思想がカギとなって時代と世代、そして文化が構築され、戦後史を論じる際には欠くことのできない時期である。

本論文で取り上げる日大全共闘（日本大学全学共闘会議）は、まさに「1968年」に起きた全国学園闘争の拠点のひとつであった。1968年5月、日本大学では右翼思想団体や体育会系サークルを利用して学生活動に暴力的な統制を加えるなどしていた大学理事会による約20億円の使途不明金が、東京国税局の告発によって発覚した。日大全共闘は、私立大学の教育をめぐるこのような問題点への一つの応答として学生による運動体として形成され、大衆団交を求めて日大闘争を起こした。全国学園闘争のなかでも最大規模の闘いとして知られる日大闘争を論じることが、「1968年」を論じるにあたってどのような意味を持つのかは十分に議論されていない。

序章では本論に先立ち、「1968年」をめぐるこれまでの議論を4つの観点から整理し(①世界システム論的観点 ②グローバル・ヒストリー ③反省的再帰的左翼運動史 ④新自由主義的転回)、「1968年」に起きた全国学園闘争のひとつにあたる日大闘争をどのように位置づけることができるのかを検討した。また、日大闘争は主として東京都心部で展開された大学闘争であり、当時の私立大学のあり方を規定する日本国内の状況にも言及した。高度経済成長期にあった1960年代の日本が「マスプロ教育」という方針を大学教育のなかで制度化していくなか、その矛盾は「マンモス大学」と呼ばれた日本大学のなかに凝縮されたかのごとく現われていたのである。

序章で述べた背景をふまえて第一章では、日大闘争を積極的にとりあげながら座談会などで日大全共闘の発言を掲載していた『朝日ジャーナル』を参照しながら、日大闘争や日大全共闘の固有性がどのような点にあるのかを検討した。日大全共闘と取材をとおした交流を深めていた朝日新聞社の高木正幸は、自身で日本大学の権威主義的な体質を

批判しながら、個人の主体性を重視し秋田明大のような人物を登場させた日大全共闘の、運動としての「新しさ」に注目していた。そして、この「新しさ」の意味を捉えるべく、日大全共闘における個人の主体性の確立という戦略と、そのための場をみずから生み出すバリケードの構築という戦術に焦点をあてた。日大闘争には前衛主義的な指導があったのではなく、自由に集結したすべての個人が「指導なき前衛」（秋田明大）として大学当局と直接に対峙しているという意味での大衆性があった。新左翼運動につらなるものとして諸党派から無縁でありえたわけではないが、運動体における個人の位置づけという点に日大全共闘の「新しさ」はあったのである。

第二章では、日大闘争のなかで生まれたメディアそのものに注目し、日大全共闘の「記録する運動」の始まりを検討した。日大全共闘が闘争を記録するようになったきっかけに触れたうえで、三つの記録媒体（①記録本『叛逆のバリケード——日大闘争の記録』②記録映画の二部作『日大闘争』と『続・日大闘争』③写真集『解放区'68——日大闘争の記録』）の分析をおこなった。これは、現在まで引き続く日大全共闘の記録活動である「日大 930 の会」につながるものである。

闘いのなかで日大全共闘は、雑誌のようなメディアが持つ情報発信の効果に注目した。日大生は大学当局による権威主義的な規制と徹底的な管理支配の下におかれていた。そのなかで日大全共闘は、大学当局の監視体制に抵抗し自由を求める声を発するために、情報発信のツールを自ら選び取り、日大闘争を記録するという独自のプロジェクトを立ち上げたのである。闘争現場から生まれたこれら記録物の多彩な成果に着目することにより、各学部が置かれた文脈のなかで異なるメディアが生み出された背景をたどることもできた。

第三章では、日大闘争を記録する「日大 930 の会」の活動内容と展開を検討した。社会運動では多くの場合、中心的な役割を果たした人物を軸に闘争記録が残されてきたが、日大全共闘のなかでは、幹部でも役職者でもない一人一人が自らの経験を語り、記録している点が注目される。この日大全共闘による日大闘争の記録活動、すなわち「日大 930 の会」の活動について、活動参加者へのインタビューによって得られた証言を参照しつつ、同会から発行された『日大闘争の記録——忘れざる日々』も取りあげながら議論を進めた。「記録する運動」といえるようなこの流れからは、日大全共闘が自ら「日大闘争を再記録する」という企てをうかがえ、日大闘争がどのように歴史化されていく一端を見いだすことができた。日本大学の体質は、日大全共闘が「1968 年」という時代に望んでいたように変わらなかったが、日大闘争という出来事の記憶を抱え込みながら、その意味を自分自身に問いかけるという作業は今日まで続いてきたのだ。

第四章では、1968 年から始まった日大闘争の過程で 1970 年に起きた「中村克己君虐殺事件」を取り上げ、大学当局が行使した暴力の様相について考察した。1970 年 2 月 25 日、日大文理学部の仮校舎があった京王線武蔵野台駅周辺でビラ配りをしていた日大全共闘商学部委員会の中村克己は、武装した体育会系の学生集団による襲撃を受け意識不明に

陥り、数日後に死亡した。日大全共闘は、大学の抑圧的な管理支配体制として動員された右翼思想団体や体育会系サークルなどの存在を「暴力装置」と規定してきた。また、中村克己の死を大学当局の制度化した暴力による犠牲として事件を認識し、「中村克己君虐殺糾弾委員会」を設置することで真相究明に取り組んだ。本章では、中村克己の死がどのように生じたのかという問題を、大学当局によって要請された「暴力装置」と警察権力が結びついて総合的な治安管理が徹底されていった経緯に着目しながら論じた。

「記録する運動」が「日大 930 の会」として「中村克己君虐殺事件」をふたたび取りあげたことは重要な到達点であった。真相を究明し死者を追悼するという営みによって、生者が「私だけの日大闘争」を描くだけでは明確にされない問題が尖鋭的に提示されている。日大全共闘は中村克己の死を想起しながら、依然とした日本大学の体質をも問題視した。いま生じている問題を過去との連なりにおいて考える根拠をつくる、そうした「記録する運動」の可能性を「日大 930 の会」は救いあげているのである。

終章では、「日大 930 の会」にいたる日大全共闘の記録という実践から、今日においてどのような課題を提示することができるのかを検討し、日本の「1968 年」を論じなおす展望の提示を目指した。